

＜意見交換＞

北村：増井さんにお尋ねします。武庫川女子大学の事例が発表されていて、加盟店からの収益が上がっているというお話がありましたが、大学でいろいろな事業をやっていくときに収益化は非常に大事な視点かと思えます。例えばうちのような国立大学が収益化事業をやるに当たってのポイント、いつもわれわれが話をするときには収益を上げていくにはどうしたらいいのかというのがなかなか越えられない壁という気がしています。もし、行政のお立場から、国立大学で何か事業をやって収益化のポイントはこれではないかというところがあればお教え願いたいと思いますが、いかがでしょうか。お話いただける範囲で結構です。

増井：地域にあるニーズ・課題というのは地域ごとに違いますし、大学が持っているリソースとか人材とかも違いますので、一概にこういうテーマ、こういう分野でというのを示すのはなかなか難しいところがあると思います。よく言われるのですが、例えばスポーツコミッションにしても作りたいけれども市長さんとかあるいは幹部に説明しても、何をやるんだ、メンバーはどうするんだ、収益って将来どういうビジョンを描いてるのと、なかなか実際難しいです。

根っこがあれば非常にいいです。既にNPOがやっているスポーツイベントがあって、NPOがやっているので参加者が2000~3000人規模になってくると、大きくしたいけれども、その組織が小さすぎるわけです。なかなか人もお金もという話で、壁に直面しているところを行政が支援してコミッションの核にして、行政も支援しながらだんだん大きくして行って、他の事業も組み合わせていく、成長していくモデル、こういうのは既に根っこがあるので分かりやすいと思います。ただ、何も無いところでこういうのやりたいんだけどというのは、なかなか難しいというのがあって、悩まれているのはそこです。

でも、だからといって、スポーツ庁さんから柱を決めてもらうと中でも説明しやすいなど言われますけれども、そんなのがあっても金太郎あめみたいになって、成功するかどうか保証の限りもないので、難しいなと、そこは地域地域で行政課題、社会課題、それに対して大学スポーツがどんなリソースでどういう組み合わせで何ができるのかというのは、本当にいろいろな

組み合わせが出てくる可能性があるんで、そこをうまく考えて行ってもらえないのかなと思います。答えになりますでしょうか。

北村：今のと関連して富山先生、今のところで先ほど参加費をただにするといっぱい来るけどみたいな話がありましたけれども、いろいろな社会貢献事業をされている中で、収益という点に関してはどのようにお考えですか。

富山：私個人としては、そういうことを意識しながらやっていかないといけないし、大学は大きなブランドなので、大学がただでやってしまうと地域でNPOをやっている人とか、そういう人たちの民業を圧迫してしまうと思います。ですので、できるだけお金をいただいて、それに見合うものを大学としても提供すると。あるいは、復興支援事業のようなものに関しては、外部資金がたくさん出ていますので、そういうところからできるだけ確保して、取り組めるようにとやっています。やはり世の中では随分お金をきちんと払ってもらって事業をしていこうというのが、昔と比べると進んでいると感じる反面、やはりまだ大きな組織で無料でやっているようなところがあるので、お金を払ってスポーツを楽しむという土壌を作っていくのも大事な役割だろうと思いますので、ぜひそういうことをしていけないといけないなと思いつつながら、現実にはやはり難しいと感じています。

北村：今日、鹿屋市から上栢さんに来ていただきまして、エンジョイスportsなどにも鹿屋市は大きく関わっていらっしゃるんですが、鹿屋市のお立場から、大学の資源をこういうふうに使えないだろうかとか、使いたいとか、そういったご要望を率直に言っただけですと、できないことはできないと言いますが、われわれも考えやすいといいますが、その辺はいかがでしょうか。

上栢：鹿屋市の市民スポーツ課の上栢と申します。

今、川前さんといろいろと連携をしながら、鹿屋体育大学とも連携をしながら、このBlue Winds事業を進めているわけですが、今の鹿屋市の課題として、体育大学との連携はそれなりに順調に進んでいるところもありますが、スポーツ施設も老朽化、それか

ら市内の施設が不足していますので、この施設のところで、例えばテニスコートが足りないとか、サッカー場が不足しているとか、競技団体とかの要望とかも来ています。少し大学にも相談をしつつあるのが、鹿屋体育大学の施設の有効活用として、大学が使わない夜間など、そういうときに施設を市民に開放して、また、市民がもっと鹿屋体育大学に足を運べないかということも今、市でも検討しているところで、大学にも相談を今少しずつしているところです。その方向を、今どういうふうにお考えかということをお聞かせいただければと思います。

あと、一つだけ大阪体育大学さんの社会貢献センターの関係で少しお聞きしたかったことがあります。この貢献センターでいろいろキャンプをしたりとか南相馬市まで行ったりされているということですが、学生さんはそれに携わっている人、ボランティアで参加をされている人、そういう方は何人が登録をされているのか、そういうところを教えていただければと思います。

以上です。

北村：では、富山先生、今のご質問をお願いします。

富山：本学では、学生を必ず巻き込んで、学生の学習機会ということでやっています。

南相馬市は大体1グループ10人ぐらいで行きますけれども、学生自身が仙台空港までは自腹で来てもらう、そこから先は大学が費用的にもいろいろ面倒を見るということをやっています。そうやって学生全体にメールを流しますと、大体ほぼ定員程度の学生から反応があって、少しお断りをするというぐらいの学生が反応してくれますので、非常にいい傾向にある、ボランティア志向が育っていると思っています。

キャンプなどは、例えば野外活動の先生にお願いして、野外活動のゼミ生や野外活動部などに関わってもらって、学生にいろいろプログラムを考えてもらったとか、プログラム指導をお願いしたりしながらやっています。なので、一般で学生を募集するとき、そのゼミとかそのクラブにダイレクトにお願いするときという形です。割と関わってくれますので、ボランティア精神は育っていると思っています。

北村：体育施設の有効活用の問題ですけれども、私で

はお答えできないというのが本当のところでした、ただ、昨年私がやりましたイベントのような形で単発的に市民の皆さんに開放して何かスポーツをやるといったことはこれまでも取り組んできていますし、そういった機会が増えるといいと私個人としては思っているところです。恒常的な利用・開放ということについては、上で話をまとめてもらえればと思います。

川前さんにお尋ねしたいのですけれども、リレーマラソンをやっていく中で、大学でやることの意味は何でしょう。他でもされていますけれども、大学でやることと、他でやることとの違いというか、そこをお聞かせください。

川前：鳴門教育大学さんの事例でいくと、実はこの間も鳴門市さんに行ってきたので、来年はコースを変更しようかと、というのも、駐車場台数があまりないので、集客という意味で変更を考えて、市民の方に聞いたそうです。そうしたら大反対をいただいたことでした。先ほどもありましたけれども、鳴門教育大学は鹿屋と同じで敷居が高いとか入りづらいとか行きづらいそうです。そこに胸を張ってじゃないですけど、意気揚々で行って、しかも貸し切ってわが物顔で走れる、ステータスでしょうか、分からないですけども、「川前さん、大反対をくらいました。よって来年も同じコースをお願いします」みたいな話になりました。やはり大学の中にいる人たちとそうではない市民の方から見た大学では、そこはすごく思いがあって違うのかなと、逆に大学はそれを活用しないといけないうのかなと思います。敷居が高い、入りにくいというところであれば、そこに入れることをブランド化するか、これが一つ手法としてありだと思っています。

北村：大槻さんにもお尋ねしたかったのですけれども、武道というもの、今回は剣道の話でしたが、そういったものを通して、インバウンドを招こうとするなどの取り組みのコンテンツの一つとして剣道があると、そこでやはり大学でやることの意味というところ、そこは他でやるよりも大学だからこうなったというところがもしあればお聞かせください。

大槻：まず、海外から来られる剣士は社会人がほとんどですが、学生との交流が当然発生します。外国人剣士は日本人の大学生だけれども、練習風景とか、どう

いうモチベーションでやっているのとか、そういうことにもものすごく興味があります。例えば、一般的な社会人のやっている道場へ連れて行くのですけれど、感覚が全く違います。要するに、先生方にどうしてもかかっていく感じになってしまって、そうではない大学生と一緒にやれるということをしごく楽しいと言ってくれています。なので、そういう意味では大学剣道部はすごくいいと思います。

あと、先生がたの剣道に対するアプローチの仕方が、やはり生徒に対する教え方というのが非常にマッチしていると思います。一般的な先生方は、どうしても技術だけだとかそういったものになりますけれども、大学でやる場合はそのところをしっかりと教育者としてやっているというのが非常に分かりますので、そういう部分が非常にいいと思います。

北村：川前さんにもう一つお聞きしていいですか。お金の話で申し訳ないのですが、鳴門の場合、ほとんど参加費で賄えているという話がありましたけれども、収益、いわゆるもうけというか利益は出ているのですか。

川前：当初は僕がお伺いして、まず学長と挨拶をして、そのあと市長と会ったときに、当然課長から、経費としてどれぐらい必要なんですかと聞かれました。確か僕は、人数によってこれぐらいですよというのを出して、当時の課長が実は7月に来た話で9月の補正を通して2月にやったというあまりない事例らしいのです。それこそやってみようということで、やった結果、計上してたのは確か150だったのですけれども、それよりも収益が多かったです。これは初めてだったそうです。当然残ったわけです。多分なんやかんや、大学の補修に使ったらいいのですけれども、1回目ですということがあって、2回目からは当然圧縮ですけれども、そういうことがありました。

先ほど参加費の話がありましたけれども、2500円とか1500円とか取っていますが、当初大学は「川前さん、1000円以下にできないんですか」と言われまして、私どももある意味民間という立場で、それをやったらもうブランド力が落ちますみたいなことを、確か飲んでいるときに話した記憶があります。

なので、先ほど先生がおっしゃったように価格は、分からないのですけれども、鳴門教育大学に関しては、

今では3000円払ってでも行きたいと、実は先ほどチームの数が伸びてましたけれど、あれは毎回キャンセルしたあとに何チームも来ます。鳴門市役所にどうしますかと、受け入れてください、当初50だったのが1回目で既に60チーム来ていますから、毎回切ってるけど来るみたいな、そういう場所になっていることが、一つうまく行っている、意図的にそう見させているのかもしれないと思いますが、そこはあるのかなと思います。なので、値付けは作る側が思っている、ここでいうと大学です、受け入れる側が思っている以上に価値がある、さっきおっしゃった価値をどう見せるかがすごく大事なのかなというふうに思います。

北村：今の話でやはり価値をどう付けていくかがすごく大事なことだと私たちも考えていまして、皆さまのお手元にお配りしている「みんなのタイムトライアル」を参加費3000円をいただいて昨年やりました。ただ、そこにはお金のこともありますけれども、うちの陸上部の学生がペースメーカーでレースを引っ張って、それで自己ベストを出せますよというのを売りにして、そこを価値にしました。そこで参加費を下げるのは、やはり学生の価値を下げてしまうということもあったので、あまり参加費は下げませんでした。

学生がペースメーカーで引っ張ることで、年末には富士山駅伝にうちの陸上部の女子が出場しましたが、そこでペースメーカーをやっていた選手たちが駅伝を頑張ってるよねということで、地域の皆さんに学生を応援してもらえるような流れが作れていくといふ循環になるのかなというふうに感じています。

ですので、収益の話でお金の話ばかりしてましたけれども、そこだけではなくて学生というわれわれが持っている資源といたら言葉は悪いかもしれませんが、彼ら・彼女らが持っている価値というものをできるだけ高めてあげて、それを地域の皆さんに還元していくことで応援していただけるような大学であったり、学生であったり、そういったものが作り上げていければいいのかなと私自身は考えています。

今回、こういった大学スポーツを通じた地域振興の可能性というテーマで進めさせていただきましても、結局は大学の活性化にもつながっていくことですので、ぜひ地域の皆さんとタッグを組みながら、ぜひ大学の資産を活用していただきたいし、われわれもそれを使っていきながら地域に対して何ができるのか

ということを考えていきたいと思っています。

では、2時間にわたりまして、長い会議ではありましたがけれども、時間になりましたので、今日の協力者会議をこれで閉じたいと思います。発表をいただいた皆さんにもう一度大きな拍手をお願いします。ありがとうございました。